

作品紹介 等妙寺蔵 絹本着色如意輪観音像

西 田 多 江

本稿は、愛媛県北宇和郡鬼北町大字芝（旧広見町）の天台宗寺院等妙寺が所蔵する如意輪観音像（以下等妙寺本、または本作品と略する）【図1】を紹介するものである。等妙寺本は、昭和三十九年（一九六四）当時の文化財保護委員会による愛媛県下の総合調査の際に、調査報告書の中で触れられている^①。ただし、「等妙寺には著しい損傷を蒙ってはいるが、明らかに藤原時代に属する如意輪観音画像一幅があり^②」と言及されるのみで、その写真、法量等詳細は報告されていない。以後もその存在はほとんど知られることなく、今日に至っている。

しかし、後述するように、等妙寺本は前述の調査報告書に記されるように制作年代が平安末期にまでさかのぼる可能性があり、愛媛県内で現在確認できる平安仏画としては唯一の貴重な遺例であるといえる。さらに、いわゆる四天王寺本尊式如意輪観音像に基づく極めて特徴的な凶像であると推定され、白描凶像を除いて絵画作品としては管見の限り現存唯一の事例であると思われる。よって、ここに改めて紹介したい。

一 表現と凶像

等妙寺本は、縦一二八・〇cm、横五六・一cmの三副一鋪の画絹に描かれている。画面の左右、上下はそれぞれ切り詰められている。残念ながら全体的に破損著しく、面相部は絵絹ごと抜け落ちて補絹・補筆され、胸部の大きな欠損を始めたとして他にも多く欠落、粗悪な補絹がみられ、現状では一見して全体像を

把握するのが極めて困難な状況にある。

特に、江戸時代のものと思われる後補の面相部は、画面中心に据えられ、右前方を見遣る様に描かれているが、体躯に比べて大きすぎ、バランスを欠いている上に、後述するように本来正面を向いていたと考えられるので、この部分は当初の像容を伝えているものではないと思われる。

その他にも欠損箇所は多々見られるが、以下では、残存する部分を詳細に観察することによって、現段階で判明しうる表現技法及び凶像を述べることにする。

まず表現及び技法を見ていく。肉身は輪郭線を墨線で下書きした上に白色身とし、朱線で描き起こしている。僅かに残る、右手首と左足先を見ると、肉身のふくよかさを手馴れた線描で表現していることがわかる。

着衣は退色が進んで褐色味を帯びており不明瞭ではあるが、恐らく黄色か黄白色であり、裏彩色が施されていると思われる。全体に截金文様が施され、地文は四ツ目菱入り七宝繋ぎ文、主文は緑青と朱で表した団花文である。衣紋線も截金で表すが、文様、衣紋線ともに截金が剥離して、銀色または墨色となつて痕跡をとどめるのみの個所も多い^③。衣の裏は丹の裏彩色を施し、表から白色を置き、銀泥で六弁の小花を散らす。ゆつたりと垂れ下がる袖口は、鮮やかな丹地に緑青と群青で唐草文様が描かれている。文様の輪郭に白線が用いられている点は注意される。

右上がりに緩やかなドレープを作り折りたたまれる裳【図3】は、輪郭を銀泥線で表し白地に銀泥の「田」形文様で埋め尽くし、大衣が金截金文様であるのとは対称的である。また、裳裾に見られる宝相華唐草文は白地を塗り残して朱で文様を描いている。

垂下した左足を乗せる白蓮華の輪郭線と弁脈も、銀泥で表される【図4】。

頭光は円形とし、内区は裏箔を押し化仏を墨線で表し、周縁に朱で火炎をあらかわす。

釧、冠など金属製の装身具には裏箔を用い、墨線で文様と輪郭線を書き起す。冠の形ははっきりしないが唐草文様が見える。冠は両肩の後ろになびき、白色で表される。

以上、細かく見てきた描写の形式及び様式的特徴から、等妙寺本の制作時期を考察する。

着衣を黄色に着色した地に截金で文様を付ける様式は、鎌倉時代以降一般的になる技法であるが、高山竜光院藏「伝船中湧現観音像」などのように十二世紀末の作品にも見られ、地文截金、主文彩色の等妙寺本も鎌倉時代の皆金色を指向する過程にあるものとするのが出来よう。ただし等妙寺本の截金文様は、平安末期を代表する他の仏画に比べると構成が単純でやや弱々しさが見受けられる。

また、白と銀を組み合わせる使用方法も本作品の重要な特徴として挙げられる。裳の表現に見られる白地に銀泥で文様を描く表現は、フリア美術館藏「如意輪観音像」や安楽寿院藏「孔雀明王像」、高山寺藏「仏眼仏母像」など、平安末期から鎌倉初期の作品に見られる。蓮台を白蓮華とし弁脈のみを銀で描く

表現も、同じく高山寺藏「仏眼仏母像」の蓮華座と共通するもので、やはり鎌倉初期の仏画の新傾向を示しているといえる。衣の裏の白地に銀の小花文を散らす点は、平安後期、十二世紀半ばの東京国立博物館藏「虚空蔵菩薩像」の裳裏に見られる表現に近い。

また、裳裾に表された朱の宝相華唐草文は、東京国立博物館藏「千手観音像」、奈良国立博物館藏「十一面観音像」の框上面、上杉神社像「毘沙門天像」の甲冑に見られる文様と同種のものである。

これらの表現技法の特徴から、等妙寺本の制作年代は平安時代末期から鎌倉時代初期、十二世紀後半に遡ると考えられる。愛媛県下には管見の限り、この時代の仏画は現存せず、等妙寺本は、貴重な作例であるといえよう。

次に図像の特徴をみていこう。等妙寺本は、左足を垂下して坐す半跏像である。台座下部は画幅が切り詰められているため判別できないが、右足は足首から先を裾より覗かせ【図5】、左足は白蓮華上に降ろしている。右手【図6】は顔の辺りまで持ち上げていることが、僅かに残存する手首とそこから垂下する袖で判別できる。その手首には腕釧を付けており、掌下部の膨らみの線や掌の墨線も見え、掌を手前に向けていることがわかる。また、右足首上に釧の一部が見え、左袖口の朱色が残っていることから、左手は右脚上に置いていることがわかる。印相は面絹の欠落のため不明である。

着衣を見ていくと、胸・胴部分は剥落により判別できないが、顔横に挙げた右上腕から大きく袂が垂れていること、また右足膝と台座、垂下する左足には足首まで袖と同じ截金文様の衣が懸かっていることから、広袂袖の衣を纏っていることが分かる。大衣とその下につけた裳は、共に右上がりに規則正しく折り返されながら台座に懸けられている。

光背は円相を火炎が取り巻いている。火炎部分は朱で炎を描き、円相部分は裏箔を押す。ここで注目すべきは、光背中に拱手する如来形の拱手する坐像の化仏が二重円相中に描かれているという点である。正確な数は現状では不明だが、頭上に弧を描くように配されている。さらにこれら化仏のうち、左下から二番目の化仏の右下には、光背或いは宝冠の一部と思われる墨線による唐草文が僅かに形を留めている。両肩の後ろには、垂下した白色の冠繪がのぞいている。

二 図像の特徴

以上に挙げた図像の特徴をまとめると、以下のようになる。

- 一、二臂像である。
- 二、右手は頬のあたりに挙げ、左手は膝上に垂下する。
- 三、左足を垂下して坐す半跏像である。
- 四、広袖の大衣を纏い、裳を着ける。
- 五、宝冠を頂く。

六、頭光の外縁に火炎を用い、内縁部には円光内に坐像の化仏を複数付ける。

等妙寺本は、寺伝により如意輪観音像とされている。まずは、如意輪観音であることの当否を再検討する必要がある。如意輪観音にはさまざまの姿があり、一の二臂像で表される如意輪観音は七種が挙げられるが、二、三の特徴を持つ二臂の如意輪観音像としては、『図像抄』に「従昔所造画二臂像。皆右手作施

無畏。左手於膝上作与願印垂下。左足坐磐石上。」と記載されるものが知られ、石山寺本尊・龍蓋寺・東大寺大仏殿像などがそれであるとされる。石山寺像が如意輪観音像とされるのは十世紀末以降のことと考えられるが、二臂如意輪観音としては、最も多く写された像である。

しかし、石山寺像が条帛を纏うのみで上半身は裸形であるのに対し、等妙寺本は四のように広袂袖を持つ。さらに袖と脚にかかる衣に施された截金文様がどちらも四つ目菱入七宝繫文であることから、肩から脚までを覆う広袂袖の大衣を纏った服制であり、等妙寺本が石山寺像と異なる図像に拠っていることがわかる。

このような特徴を持つ如意輪観音像を図像集の中に求めていくと、等妙寺本の図像は『別尊雜記』巻第十八如意輪の部に「四天王寺救世観音像 聖如意輪云々 仍私加之」と記される如意輪観音像【図7】と共通するといえることがわかる。

ただし、細部には四天王寺像とは異なる点も見られる。『別尊雜記』に記された像では、結跏した右足首が垂下した左膝にかかっているが、等妙寺本では右足首は左膝の手に置かれている。四天王寺本尊式如意輪観音の彫像でも、右足首は左膝に置かれており、また、『別尊雜記』では、胸前に垂れる冠繪が、

等妙寺本では肩の後ろに垂れる。頭光の外周部は、『別尊雜記』では飛鳥仏の彫像写しらしく火炎の周囲をさらに宝珠形に囲っているが、等妙寺本では赤色の火炎が表されるのみである。これらの相違点に関しては、彫像写しとしての特徴は表現しつつ、平安末期の貴族らが好む優美さを損なわないための絵画上の表現が優先されたためであろう。

よって本作品の尊名は、如意輪観音とみてよく、さらに四天王寺式如意輪観音像であったことが明らかとなった。

三 四天王寺本尊式如意輪観音像

平安時代末に心覚によって編まれた『別尊雜記』では、四天王寺本尊の救世観音像を二臂の如意輪観音としている。この像容の如意輪観音は、聖徳太子信仰と強く結び付いている。

聖徳太子を観音とする説は、すでに天平宝字五年（七六一）法隆寺東院資財帳に、夢殿本尊救世観音像を「上宮王等身」の観音像であると記すことに見え、正暦三年（九九二）の『聖徳太子伝略』では、太子と観音を一体であるとする説が記される。さらに、平安時代末、院政期に成立したと考えられる『東大寺要録』に、聖宝が太子の後身であるとする説があり、その聖宝が守覚法親王（久安六年（一一五〇））建仁二年（一一二〇二）『御記』などに如意輪観音の化身であるとされることから、この頃、十二世紀までには聖徳太子の本地は如意輪観音であるとする説が存在していたと推測されている^⑩。

如意輪観音信仰と結び付いた聖徳太子信仰は、平安時代にまず天台宗に見出すことが出来る。そもそも四天王寺は、熱心な聖徳太子信奉者であった最澄を契機として、天台僧が四天王寺別当職に補せられることが圧倒的に多くなる。以後、天台僧の間で聖徳太子信仰は衰えることなく継承されていく。

現存する四天王寺式如意輪観音像では、法隆寺聖霊院像、広隆寺像、桂宮院

像、三千院像、廬山寺像などが知られ、制作年代は平安時代後期が上限と見られる。ただし、聖霊院像、広隆寺像は模刻像であるとはいいながら、穏和な表現が時代の趣好を如実に反映しており、天智天皇の代に四天王寺金堂に安置されたという本尊弥勒菩薩像の表現様式までも写しているとは言い難い。図像的一致と様式的一致が必ずしも同じ地平に立つものではない、ということがこれらからわかる。

等妙寺本は、著しい剥落のため、面貌表現がいかなるものであったか伺い知ることが出来ないが、大衣に見られる截金文様や彩色文様が繊細で、平安時代末期の特徴を示すことから、おそらく平安仏画にみられるような柔和な表情であったと想像できる。金銅造の如意輪観音像が喚起される金色の衣を截金で表しつつも、裳や袖端は彩色文様で装飾し、肉身は白く、踏み下げた蓮華は銀白色に輝く、優美な如意輪観音像であったろう。広隆寺像、法隆寺聖霊院像などに見られる平安時代後期の模刻の造立への姿勢―図像上の特徴には忠実だが、同時代の好尚を反映した典雅な表現を用いる―が、画像である等妙寺本においても同様であることが確認できる。

以上の点から、等妙寺本は四天王寺式如意輪観音像の彫像写しの著色画像としては管見の限り唯一の作品であるといえる。太子〓如意輪観音説が文献上確認できる平安末期とほぼ同時代に制作された等妙寺本は、四天王寺式如意輪観音像か彫像のみならず画像にまで波及していたことを物語っている点で、また二臂如意輪観音像を考える上で、また、彫像写しの例としても重要であるといえよう。激しい損傷が惜しまれるが、極めて興味深い作品である。

四 結びにかえて

等妙寺の立地する愛媛県南部地方は、高知との境界一体を含めて、天台宗山門派の寺院が数ヶ寺知られる。その中でも最大規模寺院であった等妙寺は、元

徳二年(一三三〇)に理玉によって建立されたと伝える^⑧。理玉は当時、天皇及び貴族の帰依を受けていた天台僧円観慧鎮の弟子である。円観(弘安四年(一二八一)〜延文元年(一二五六))は後醍醐天皇の帰依を受け、文観らと関東調伏の修法を行ったことにより奥州に流されたことで知られるが、乱後、嘉暦元年に法勝寺大勧進となり、比叡山講堂・四天王寺・東大寺などの復興にも尽力している。また、天台宗における戒律の衰微を憂い、円戒復興に勤めた事でも知られ、伊予等妙寺、相模宝戒寺、加賀薬師寺、筑紫鎮弘寺の遠国四箇戒壇を設けて戒律の地方伝播につとめたとされる^⑨。

円観は四天王寺を復興し、四天王寺別当を兼ねている。また、円観に帰依した後醍醐天皇も自身の朱印を押した『四天王寺縁起』(後醍醐天皇宸翰本)の存在から、熱烈な聖徳太子信奉者であった。鎌倉末期から南北朝時代頃の法勝寺流にみられる、四天王寺との強い結びつきと聖徳太子信仰の隆盛は、等妙寺本が受け継がれる場に相応しいだろう。

等妙寺本は、表現技法が平安貴族の好む優美で洗練されたものであり、在地の絵師の手によるものとは考えがたく、京で制作され、開山の時代から、室町時代にかけての法勝寺と等妙寺僧の頻繁な往来のあった時代のある時期に等妙寺にもたらされたとみてよいだろう。

また、同地方が中世西園寺氏の荘園であったことなどから、戦国時代の戦乱で焼亡し、移転したにもかかわらず、平安時代から室町時代にまで遡る寺宝が若干現存する^⑩。

等妙寺における聖徳太子信仰については今回確認できなかったが、近世の成立と考えられる『宇和旧記』所収「予州奈良山等妙寺縁起」中に「本尊ハ如意輪観世音菩薩娑婆有縁ノ導師ナリ。(略)日域仏法ノ濫觴ハ聖徳太子救世観音方便ニ因リテナリ。」とある。また、同縁起の寺宝を列記した中に「一、観音絵聖徳太子御勅筆」とあり、等妙寺本に該当すると思われる。少なくとも『宇

和旧記』成立時には、等妙寺本が聖徳太子作と伝えられていたことが知られる。現在、同寺史に関しては、考古学、文献史学の分野での研究が進みつつあり、中世を通じて京と深い交流があったことが確認されている^⑪。本稿では、本作品が等妙寺にもたらされた経緯や、同寺における信仰の様相について考察を加えることは出来なかったが、聖徳太子信仰の四天王寺式如意輪観音画像が伝来してきたことは、同寺の歴史を考える上でも意味を持つだろう。等妙寺本の存在が、四天王寺式如意輪観音像を考察する上で新たな遺例となることを示したい。

① 『四国八十八箇所を中心とする文化財(愛媛県下)』—文化財集中地区特別総合調査報告第3集—文化財保護委員会 一九六四

② 註1前掲書 pp.64—65

③ 『宇和旧記』芝村の項によると、寛文十一年に宇和島藩主伊達宗利が等妙寺の絵像七幅(観音、不動、十六善神、受戒本尊、地藏三幅一対)の表具を寄進している。この七幅は現在も同寺にある仏画にそれぞれ相当し、「観音」は如意輪観音像と思われる。

④ 截金線が剥離して銀線または墨線に見える現象については、截金を作りやすいように金箔に重ねられた銀を多く含む仏師箔が用いられているためと指摘されている。田口栄一「鳳凰堂九品来迎図調査報告—両側壁画の現状と来迎聖衆の図養及びその表現(上)—」

『仏教芸術』一四一—一九八二年泉武夫「国宝虚空蔵菩薩像とその信仰背景」『学叢』11、12号—一九八九、九〇年、同

⑤ 泉武夫「国宝虚空蔵菩薩像とその信仰背景」『学叢』11、12号—一九八九、九〇年、同

⑥ 『仏画の造形』吉川弘文館 一九九五年 再録

⑦ 『大正図蔵』三二二頁「画像抄巻第六」

⑧ 註(6)『日本の美術』三二二 如意輪観音像 馬頭観音像 pp.26—27

⑨ 『大正図蔵』三一七頁「別尊雜記巻第十八」

⑩ 四天王寺本尊の尊名はいささか複雑な変遷を経ている。本来弥勒菩薩として造立されたが、石山寺本のごとき二臂如意輪観音と近似しているため混同され、やがて奈良時代末頃からは如意輪観音として信仰されるようになる。さらに平安中期にいたって聖徳太子救世観音説から、救世観音ともみなされるようになる。

松浦正昭「四天王寺本尊と飛鳥仏教の展開」『日本古寺美術全集七 四天王寺と河内の古

寺」集英社 一九八一

⑪ 註(6) 参照

⑫ 「弥勒菩薩像一軀蓮華座右近江朝廷御宇天皇御世請坐者」『太子伝古今目録抄』『大日本
仏教全書』

⑬ 等妙寺の縁起については、「齒長寺縁起」(重要文化財)が重要な史料となる。同縁起
について、本稿では、翻刻として中井香信『國寶齒長寺縁起概説』(齒長寺保存会発行、
一九三六年)、和田茂樹編『齒長寺縁起―複製と翻刻―』『瀬戸内社縁起集』(広島中世
文芸研究会、一九六七年)に基づき、他に主な研究として、五葉道全『齒長寺縁起書―建
武の中興の武士たち』(文芸社、二〇〇二年)、石野弥栄『「齒長寺縁起」の世界―南予中
世社会の一断面』『伊豫史談』三三〇(伊豫史談会、二〇〇三年)を参考にした。

⑭ 遠国四箇戒壇は、伊予等妙寺に加えて、相模宝戒寺、加賀薬師寺、筑紫鎮弘寺からな
るとされる。

なお、法勝寺二世惟賢と元応寺との間に起こった法流相承争議の際、法勝寺から元応寺
へ移った文書類を補完するため、等妙寺通悟から法勝寺へ戒壇道場図などの写本が贈られ
ている。さらに、十五世紀には等妙寺から法勝寺に入寺、住持となった僧侶も数名記録さ
れており、関係は続いていた。(『統天台宗全書 円戒一』、西村阿紹「本寺法勝寺と伊予
等妙寺」『西南四国歴史文化論叢よど』二〇〇一、鬼北町教育委員会「等妙寺跡―平成
一一年〜平成一六年度 学術調査に伴う埋蔵文化財調査報告書―(第二〜六次調査)』二
〇〇五 石野弥栄「等妙寺の開創と展開」)

⑮ 豊臣秀吉の四国征伐の後に戸田勝隆の宇和郡入りによって荒廃し、焼失、創建当初の
位置(広見町鬼が城連山郭公岳中腹)から、現在地(広見町芝)に移転した。現在、旧寺
域は発掘調査が進んでいる。(広見町教育委員会編『旧等妙寺発掘調査概要報告書』一九
九五、清家直英「旧等妙寺跡調査について」『西南四国歴史文化論叢よど』西南四国歴
史文化研究会 二〇〇一、註(14)『等妙寺跡』)

⑯ 数点の仏画のうち、「如意輪観音像」のほかに注目されるものとして、「不動明王二童
子像」「授戒本尊」がある。「授戒本尊」は法勝寺流円頓戒の儀式の際本尊とされる珍しい
図像で、制作年代は室町時代とみなされる。「授戒本尊」の役割については、寺井良宣
「法勝寺流円戒の旧跡『伊予等妙寺』と西教寺『戒灌頂』の授戒本尊」『真盛宗報』一二五
(天台真盛宗一九九八)に紹介されている。

「不動明王二童子像」は制作年代が鎌倉時代中期(十三世紀)にまで遡ると思われるもの
で、不動明王はいわゆる不動十九観相、二童子は円心様で描かれる。これについては稿を
改めて紹介したい。

⑰ 註(14)『等妙寺跡』石野弥栄「第二章 遺跡の立地と環境・第二節 歴史的環境」及び
同「附論」

本稿を執筆するにあたって、等妙寺住職関覚圓師には、調査をご快諾くださいました。厚
く御礼申し上げます。また、作品の赤外線写真をご提供いただいた北宇和郡鬼北町教育委員
会出淵公造氏、等妙寺史について多くのご教示をいただいた愛媛県歴史文化博物館学芸課長
石野弥栄氏に感謝いたします。